

イギリス人とその女性観について

野村ヒサ

"What a jam!"

"Some body is coming."

"Oh! Is she?"

"No. Just for fun."

以上の会話は、1980年3月下旬のある朝、私がダブルデッカーの中で耳にしたものである。一寸面白かったので今でもはっきり覚えている。あの日、ロンドンの空は美しく晴れていたが、ひどい交通渋滞で、ナイツ・ブリッジの近くで、ダブルデッカーが7~8台じゅずつなぎになってしまっていた。退屈した隣人同志が、

「何て渋滞だろう。」

「おえらいさんがお通りなんだよ。」

「へエ、本当？」

「うそ、じょうだん。」

なんてふざけあっていたわけである。

どうしておえら方が「彼女」なのかしらと、私は、ふと思ったが、言われてみると、たしかに Queen Elizabeth も Mrs. Thatcher も女性である。日本人である私からみると、イギリスという国では、骨の折れる仕事は女性に任せて、男性たちはのんびりとクリケットでも楽しんでいるのかという気もするが、どうも実のところはそんなものではないようで、仕事の上では男女の差別をあまりしない結果であると考えた方が当てているようである。

下宿の奥さん（生粋のイギリス人）とお茶を飲んでいたら、Thatcer

女史の雄弁さを私がほめると、

“She doesn't know where to stop.”

という言葉が返って来た。同性の眼からみると、Thatcher さんの雄弁は鼻につくものなのだろう。(Thatcher 女史は Oxford 大学の学生時代に、家庭教師? についてスピーチの猛勉強をした結果、スピーチ・コンテストで優勝するほど上達した話は有名である。)

下宿のおじさんの方は、Thatcher 女史は美人なのが幸運だったという。洋の東西を問わず美人が得をするのだという気持は、同じものらしい。

私たちの眼からみると、イギリス人は割合に冷静で合理的で、男女の差別も早くから、目立たなかったように見えるが、私の読んだところでは、イギリス男性は、なかなか封建的であったと思われる。

イギリス・フェミニズム (女権拡張) 運動の草分けと目される Mary Wollstonecraft (1759-1797) は、1792年にその著書 *A Vindication of the Rights of Woman*^① の第一版の中で次のように述べている。

“Would men but generously snap our chains, and be content with rational fellowship instead of slavish obedience, they would find us more observant daughters, more affectionate sisters, more faithful wives, more reasonable mothers—in a word, better citizens. We should then love them with true affection, because we should learn to respect ourselves...”

だいたい、

「男性が私たち女性の束縛を気前よく断ち切り、卑屈な服従の代りに理性的な交友精神で満足してくれさえしたら、彼らは、女性が戒律をよりよく守る娘たちあるいは、いっそう愛情深い姉妹たち、あるいは、より忠実な妻たち、理性的な母親たち、要するに、よりよい市民たちであることに気がつくであろうに。そうなれば当然私たち女性も真実の愛情で彼らを愛するであろう。なぜなら私たちは自分たち自身を尊重するよう

になるはずであるから。」

といった意味であろう。

Margaret Drabbleによれば、この Mary Wollstonecraft は恋人に去られて失望し、Putney Bridge から Thames 河に投身自殺をしようとしていたところを William Godwin に助けられ、その後二人は結婚した。(もし投身自殺してしまっていたら女権拡張運動の闘士も女権擁護論も世に出なかったであろう。) 女兒が生まれ、その女兒は成長して、P. B. Shelley (1792-1822) の(二度目の)妻となった。

同時代の日本では、1776年に『雨月物語』が刊行された。川柳が流行したのもこの頃である。11代將軍家斉の世である。

Mary Wollstonecraft と同時代の女流作家たち (Jane Austen や、少し後の Charlotte Brontë) の作品に登場する家庭教師は、女優、作家を除けば数少ない独立した女性の職業であったが、それも裕福な家庭の使用人の一人に過ぎないことが多かった。女性の職業は非常に数少く、あまり裕福でない家に生まれた女性にとっては、結婚だけが確実な生活の手段と言い得た。

Jane Austen の *The Watsons* のヒロイン Emma Watson は、Austen 小説のヒロインたちのうちで、最も身分が低い女性であるが、彼女はその小説のはじめの方で、次のように言っている。

...but you know, we must marry.— I could do very well single for my own part—A little company, and a pleasant ball now and then, would be enough for me, if one could be young forever, but my father cannot provide for us, and it is very bad poor and laughed at ... ②

だいたい、

「おわかりでしょうけど、私たちは結婚しなければなりません。私自身はひとりだって、じゅうぶんやっつけられるでしょう。——ほんの少数のつきあい仲間と、それにとときどき、楽しい舞踏会があれば、私にはじゅ

うぶんなのよ。もし、人が永遠に若くていらればね。でも父は私たちが養ってはくれないわ。だからオールドミスになって、貧乏で、人に笑われるのはとてもつらいのよ。」といった意味であろう。

適当な男性を見つけて結婚出来ても男性の方から一方的に離婚を申し渡されることも多く、帰る場所のない妻は prostitute (売春婦) に身を落すものが数知れなかったということである。50年ほど時代が異なるが、Charles Dickens (1812-70) の時代 (1850) のロンドンには約8万人の売春婦がいたという記録がある。³

当時のロンドンの人口は約250万人だったそうだから、男性、子供、老人を除けば10人の女性のうち1人は売春婦だったという計算にもなるうか。1801年のロンドンの人口は約86万人だったと言うから、50年のうちに約3倍にふくれ上がったことになる。売春婦の数もその割合で割引けば、Wollstonecraft や Austen の時代のロンドンには約2万人の売春婦がいたことになるという計算は少々乱暴であろうか。

ともかく *A Vindication of the Rights of Woman* の出版ということ自体が、男女差別 (女性の地位の低さ) への自覚と憤慨を女性が痛感しはじめたことを意味しているということは明らかである。

日本でのこの種の運動は若松賤子 (1864-1896)、平塚らいてう (1886-1971) などの時代まで行われなかったようであるから、この点では日本が100年ほど後れていると言えるかも知れない。

話がまた Cambridge 大学のことになるが、Cambridge 大学の female founders (女性創設者) について少し考察してみたい。驚いたことに初期の創立による15の大学 (Cambridge には現在34の大学がある) のうち、6つの大学が女性によって建てられたのである。

- ① Clare College は Edward I の孫娘である Lady Elizabeth de Clare によって
- ② Pembroke College は the Countess of Pembroke によって

③ Queens' College は

Queen Margare of Anjou	(Henry VI の妃)
Queen Elizabeth	(Edward IV の妃)

の二人によって建てられた。Queen's ではなく Queens' である理由である。

④ Christ's College は Henry VII の母 Lady Margaret Beaufort, によって

⑤ St. John's College も上述の Lady Margaret Beaufort によって

⑥ Sidney Sussex College は Lady Frances Sidney, Countess of Sussex によって

また後期の創立で Cambridge の女子大のくさわいである

⑦ Girton College は Emily Davies によって建てられた。(この大学の創設基金集めのために女流小説家 George Eliot (1819-80) が奔走したことは有名な話である。

Cambridge 大学の女子教育についてみると、女性が講義に出席することが許可されたのは1881年である。(University College of London つまり、いわゆるロンドン大学では、すでに1878年に女性に degree を与えはじめていた)

1890年には Phillipa Fawcett という女性が数学の優等卒業試験 (trips) に最高点を取り、一大センセーションとなった。

1897年になってやっと女性に degree を与えてよいかどうかについて投票が行われ、圧倒的多数で否決されてしまったそうである。

Oxford 大学では、1919年にすでに、女性に full membership をすんなり与えたそうであるが、Cambridge の男性は Oxford に比べてより封建的なのか、1926年になっても女性はやっと学部に入ることと、大学の職につくことと、賞を取ることを許されたにすぎなかった。Cambridge 大学で女性に full membership が与えられたのは1947年 (つまり第二次世

界大戦後) になってからである。

Cambridge 大学の女性卒業生第一号は、George VI の妃 Elizabeth で、1948年に honorary degree of Doctor of Laws が授与されたそうである。

前にも述べた通り、Cambridge に最初から女子大として建てられたのは Girton College で、創立は1873年であった。私は Cambridge に留学中、Darwin College に籍を置いたが Girton College にも二週間に一度通っていたことがあった。Girton は、他の大学が集中している City Centre から3マイルくらい北の方の辺りな場所にある。(校庭にはリスがチョコチョコ歩いている。) このように離れたところに建てれば男子の学生たちが訪ねて来たりしないだろうという、おえら方の配慮だったときいて私は驚いた。Girton College の図書館には馬車 (バスではない) に乗って City Centre の講義室に通う女子学生たちの絵がかけられている。またひどく古風なブルーマスをはいて、避難訓練のために校舎に立てかけた梯子を降りる女子学生の絵も、私には非常に興味深かった。

以前からきいてみたいと思っていたこれらの絵の説明を、津田塾の恩師近藤いね子先生から伺った時には、私は思わずふき出しそうになるのを、ようやくこらえた。

(近藤先生御自身は1937年頃 Girton College に在学して居られたのだし、今でも毎年夏休は Cambridge で過されるのだから、この上なく確かな説明であるわけだ。)

Girton College の次には女子大として Newnham College (1875年)、New Hall (1954年)、Lucy Cavendish College (1965年) の三大学が設立された。

1972年になって King's College, Clare College, Churchill College の三大学が女子学生の入学を許可した。(この点では日本の方がずっと進んでいる)

女子大として設立された Girton College に、男子学生が入学を許可さ

れたのは1979年になってからである。

世界一早く地下鉄を走らせ、科学においては今なお世界に誇るものが多い大英帝国も、男女差別においては大したことはないというのが私の実感である。

参考文献

- ① Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman* (Harmondsworth, Penguin Books Ltd 1985)
- ② Jane Austen, *Lady Susan · The Watsons · Sanditon* (Harmondsworth, Penguin Books Ltd. 1974) p. 109.
- ③ David Daiches & John Flower, *Literary Landscapes of the British Isles* (London, Paddington Press 1979) p. 67.
- ④ Laurence & Helen Fowler, *Cambridge Commemorated* (Cambridge, Cambridge University Press 1984)